

トライアスロン観戦者調査
～「みる」スポーツとして発展するために～
Research on Triathlon Developing as a Spectator sport
1K08B226-3 山田智也

指導教員 主査 原田 宗彦 先生 副査 松岡 宏高 先生

【緒言】

メディアコンテンツを高めるためには「みるスポーツ」として魅力的にならなければならない。Mullin, B. らは、コトラーの中核・拡大の概念を援用し、みるスポーツプロダクトが、統合された総体と多くの独立した構成要素の両者から成立すると指摘した。(2008 原田ら) この構成要素をトライアスロンに置き換えると、観戦者の中核ベネフィットである「イベント経験」は、ゲームフォール(ルールとテクニク)、選手、用具、場所の4つの中核要素からなる。拡大要素、つまり観戦者を中核ベネフィットへと導く要素は、プログラムや音楽、ショップ、レースが見やすい環境などが挙げられる。これらの拡大要素を大会に加えることで、レース観戦の経験価値を高めることができる。つまり、観戦者の経験価値を高めることが、トライアスロンを「みるスポーツ」としての魅力に繋がる。Schmitt, B.によれば、中核ベネフィットとしての「経験価値」は自発的に生み出されるものではなく誘発されるものであり、経験価値マーケティングによって顧客にとって望ましい経験価値を表出させるための環境を作り出す必要がある。また、主催者側は観戦者の特性を明らかにし、彼らに対してどのような経験価値をもってほしいかを明確にする必要がある。

【目的】

本研究ではトライアスロンの「みるスポーツ」としての価値を向上させるために、トライアスロン観戦者に対する経験価値マーケティングに必要な基礎資料を得ることである。そのために、(1) デモグラフィクス属性、行動的特性など、トライアスロン観戦者の特性明らかにすること、(2) 観戦者のセグメンテーション化を行い、その特性を明らかにすること、(3) トライアスロン競技の観戦における課題を明らかにすること、の3点を解明することを目的とした。

【調査方法】

本調査では、2011年10月16日(日)にお台場海浜公園で開催された日本トライアスロン選手権にて、観戦者を対象に調査を行った。調査方法は、訪問留め置き法による質問紙調査で、男女各レーススタート前にスイム会場周辺で観戦者に直接手渡し、その場で回収した。275部配布し218部回収した。

【結果と考察】

(1) サンプルの男女比はほぼ半分、年齢では40代、50代合わせた割合となり全体の44.7%となり、

観戦者の年齢が比較的高いことが分かった。また、居住地では東京、神奈川、千葉、埼玉の関東4県で全体の7割を占めたが、北海道や沖縄から来場している観戦者もいた。

(2) トライアスロン競技経験の有無と観戦回数の比較では、初観戦者約95%の観戦者に競技経験がないことが分かった。この結果は、トライアスロンが「みる」スポーツとして成長していけるという可能性を十分に感じさせるものとなった。

(3) 観戦理由尺度、動機づけ尺度と観戦回数の比較では、トライアスロンの知識や愛着に関する項目で、初観戦者と観戦経験者の間で多く有意差が認められた。観戦回数が「1～7回」と「8回以上」の間では有意な差はほとんど見られなかった。

(4) セグメンテーションのために、動機づけ尺度から探索的因子分析によって抽出された4つの因子をもとにクラスター分析を行い、サンプルを3つのクラスターに分類した。第1クラスターの特徴は、平均年齢が43.7歳と高く、トライアスロン競技経験がない者が9割を占めていることである。一方で、応援している選手がいると答えた観戦者も9割を占め、また、遠方からの観戦者が多いことから「コアファン」と命名した。第2クラスターでは、平均因子得点が「共感」を除く3因子でもっとも高く、また、競技経験者が多いことから「競技志向コアファン」と命名した。第3クラスターは、観戦回数をもっとも多い結果となったが、その点で有意な差は認められなかった。平均因子得点はもっとも小さい値となったため、このクラスターを「フリンジファン」と命名した。

(5) トライアスロン観戦種目の魅力と課題では、一番面白い種目が「バイク」、一番面白くない種目が「スイム」という結果になった。

【提言】

今後の提言としては、本研究で得られた観戦者の特性や類型化を今後の経験価値マーケティングの基礎資料として活用できる。また、観戦者を増加させるためのアプローチ方法や、大会運営の改善、メディアへの露出方法の参考としての使用が可能であると考えられる。トライアスロン観戦者の多くが競技経験者であるという筆者の仮説が覆され、その中で新しい発見があり、この調査から多くのデータを得ることができた。本研究を第一歩に、今後の研究に役立てられるものだと考えている。